

The World's Greatest Motor Culture Magazine

創刊号 2017年3月号
「モーターヘッド」Vol.24 2017年2月1日発行

モーターヘッド

M
O
T
O
R
H
E
A
D

San-ei shobo
1050 JPY

24

Street Fighter



全体を見ての総括で言えば、ショーカー的なスタイルとチューニングカーが絶妙に融合されていたな、という印象。例えばRE雨宮のFCなどはエアロも独特で見た目のショーマンシップも充分だし、それでいて3ローター搭載というモンスターマシン。全体的にそういった面での絶妙なバランスの良さが見て取れたと思います。そういう意味ではチューニング&カスタムは熟成というか進化しているな、というのを感じましたね。それと

個人的にピックアップしたいのがオフロード勢。FLEXのラングラーやピックアップトラックなど、特に面白いのが多かった。N-LaboのT880も濃くクリエイティブで良かったね。それとLINE-Xという衝撃に強いペイントは注目ですね。あの無骨な風合いの塗装技法は、アメリカでは数年前に登場していたものですが、今回LINE-X JAPANとしてブースを出していました。これも今後注目していきたいですね。

チューニングカーに、見せる要素を絶妙に取り入れたクルマが注目。

チューナーコンプリートに独自のアレンジを加える。



最近ではベンツもBMWもアウディも、ストックのデザインが本当によく出来てるものが増えていて、昨年あたりまではそれを活かす方向性でのリップスプイラー装着などが多かった。けど今年はフルエアロで全く違うスタイルを製造していく、というしっかりと

EC.SPEC
井口拓也 Takuya Eguchi

歩みを進めた方向性のブランドが一気に増えたような気がしますね。ビルダーとしての自分が今年の流れとして押さえておきたいのは、

やっぱりチューナー系です。今回ハーマンブースに置かせて頂いたGLEもそうなのですが、今まではチューナーのフルコンプリートってその時点で完成されているものなので、あえて手を加える必要がないと思われていました。でも、そこに僕らのようなカスタムビルダーがアレンジを加えていくことで独自性を出す方向性というものをそろそろアリなんじゃないかと考えてます。GLEも仕上げに拘った細かなアレンジを詰め込んでいるんですよ(P150参照)。

Voice #08

Voice #09



Voice #06

モータージャーナリスト
ディノ・ダッレ・カルボナーレ
Dino Dall Carbonare

日本のチューニングカーを狙った最強の18インチを造った。



OZ S.p.A CEO
クラウディオ・ベルノーニ
Claudio Bernoni

Voice #07

僕は特に東京オートサロンでブースは構えていないけど、でも興味がないわけじゃない。むしろ僕は日本が、そして日本車が好き。自分でもインプレッサには何回も乗っていてね。日本ならではのハイパワー四駆で雪道を走るのが好きなんだ。それに、昨年に公開したフォーアータGT、F1やWRCなどにホイールを供給するレース部門の技術の粋を集めた究極のパ

フォーマンスホイールだと自負しているんだけど、これにはヨーロッパではさほど需要がないことを承知のうえで18インチを設定した。狙いは今年の会場にもズバリと並んでいた日本のチューニングカー。日本はボディサイズやタイヤサイズの関係で18インチに大きな市場があるんだって分かったからね。もちろん、ここにあるトップシークレットのR35 GT-R用に相応しいような大径サイズにも力を入れていくよ。今年も会場にはヒントがたくさん潜んでいた。今、一刻も早く持ち帰って開発したい気持ちでいっぱいだね。



4×4&SUV
STYLE

EC.SPEC AMG GLE63 S Coupe × Hamann

このGLE63 Sクーペには、ハーマンにとっての新たな挑戦を感じる。いまでもこそハイエンド系を中心に多種多様なクルマを染めあげるハーマンだが、かつては創始者リチャード・ハーマンのレース経験を活かしたBMWオンリーのブランドであり、現在も芯にあるのはBMWチューナーとしての側面だ。だからこそなのか、ライバルに相当するメルセデス系は、SLS AMGやGクラスといった特殊モデルを除けば避けてきたところが見受けられた。

それが、ここへきてGLE系へと挑戦した。本国では最高出力を680psにまで高めて、300km/hで楽々クルージングできるグランツーリスモを完成させている。この1台は、そのモンスター SUVのエッセンスを落とし込んで生まれたもの。ボディパーツを中心とするハーマン・コンプリートキットをもとに、福岡の気鋭カスタムショップであるECスペックがまとめあげた。

単にボン付けするだけではなく、そこにひと味加えるのがECスペックだ。一見したところ全身黒ずくめながら、樹脂部分を塗装したり、塗装の中でもメタリックの有無を絶妙に使い分けたりと質感向上には余念がない。ユニーク・フォージドと呼ばれる23インチホイールも、ボディと統一させるためにあえてグロスブラックでお色直しを。統一感こそ重要なユーロコンプリートカーを、ECスペックの“あとひと手間”が支える。彼らこそメルセデスへ挑戦するハーマンを支える、影の功労者である。¶

Hamann Wide Body Kit

UNIQUEFORGED(11.0J×23)

45万円

一つ上の“優越”。

前後スポイラーに前後フェンダーエクステンション、サイドステップなどが調和して一体感を感じさせるハーマンのコンプリートキット。さらに純正の樹脂部分をシボ取りして塗装するなどECスペックの技も光る。ホイールはユニーク・フォージドの23インチ。純正はアナダイズドブラックだったが、統一感を考慮してグロスブラックに置き換えている。

Text : 中三川大地 Daichi Nakamigawa

Photo : 楠本ヒロト Hiroto Kusumoto